

火山防災における担い手組織形成のための戦略的プロセスデザイン

Strategic Process Design for the Formation of Key Actor Organizations in Volcanic Disaster Prevention

山下 希空・○大西 正光・中尾 聡史・山 泰幸・中道 治久・井口 正人

Noah YAMASHITA・○Masamitsu ONISHI・Satoshi NAKAO・Yoshiyuki YAMA・Haruhisa NAKAMICHI・
Masato IGUCHI

This study explores how community-based disaster preparedness can be encouraged without creating a double-bind that suppresses resident initiative, drawing on collaborative activities related to potential large-scale eruptions of Sakurajima volcano. Using a Modified Grounded Theory Approach and autoethnography, the analysis identifies a four-phase process leading from relationship building to autonomous resident action. Non-directive researcher engagement, strategic convergence of dialogue, and a reversal of care relationships were key mechanisms enabling sustained local disaster-prevention activities.

1. はじめに

鹿児島市街地では、向こう 20～30 年以内に起こる可能性がある桜島の大規模噴火に伴う大量軽石火山灰降下による深刻な被害の発生が懸念されている¹⁾。大量に軽石が堆積した市街地で生活することは困難である一方、噴火中の避難行動は危険を伴うため、大規模噴火の予兆が観測された段階での事前避難が被害軽減には最も有効である。

災害はローカルな現象であり、一定の防災活動は、地域住民が主体となって取り組まざるを得ない。しかし、専門家による主体的な準備行動を促すこと自体が専門家から住民に対して「主体的たれ」という「指示への服従」を強いる「ダブルバインド（二重拘束）」²⁾となり、かえって受動性を招く矛盾をはらんでいる。本研究は、著者らの実践的経験を修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (M-GTA)³⁾により分析し、第三者が関わりながらもダブルバインドの問題を乗り越えて、地域の防災活動を担う責任主体を形成するための専門家と住民の間のコミュニケーションプロセスを戦略的にデザインするために有用な方法の導出を試みる。

2. 実践的活動の概要

著者らは鹿児島市の DID 地区に位置する八幡校区において、研究者と地域住民による協働活動に取り組んでいる。詳しい活動の経緯と活動理念は別の文献⁴⁾に譲るが、京都大学の桜島火山観測所で大規模噴火の予知研究に長年取り組んできた火山学者の井口と当時京都大学防災研究所に所属した土木計画学を専門とする大西、大規模噴火への

対応への課題意識を有していた八幡校区コミュニティ協議会会長の和田一雄氏が中心となって、2021 年から 3 年近く計 10 回にわたって桜島防災ワークショップを企画、実施してきた。その結果、住民自身に取り組んだ活動の成果として、2024 年には、ワークショップ参加者自身が作成した防災啓発パンフレットを出版できた。

以上の成果をベースに、草の根的な地域活動を担う主体形成を企図して、日常的に何らかの地域活動に従事している女性の方々の集まり「女子会」と称されていた一を 2024 年 12 月に開催した。活動は隔月で計 7 回開催され、住民同士の自由かつ自発的な対話を通じて創発的な行動のきっかけやヒントを研究者側が考えながら投げかけるような形でコミュニケーションを進めた。

3. 分析方法の概要

本研究では、住民の行動変容に寄与した要素とそのプロセスを解明するため、修士 2 年の第 1 著者が行ったインタビューおよび参与観察記録に基づき、M-GTA を用いた分析を行った。M-GTA は、分析者の問題意識を明示した分析テーマと分析焦点者を起点に、データとの往復的比較を通じて概念・カテゴリー間の関係性を理論化し、実践に還元可能な中範囲理論を構築する質的分析手法である。また、研究者と住民の相互作用を捉えるため、研究者自身の行動や内省を記述するオートエスノグラフィーの手法を採用した。最終的には分析した結果を整理し、M-GTA の手法に則って、ストーリーラインを作成した。

4. 分析結果

以下に、M-GTA に基づき 4 つのフェーズに分割して作成したストーリーラインの概要を示す。

(1) 土壌づくりと関係性の構築

日常の草の根的な地域活動が主に女性によって支えられているという研究者側の観察から、コミュニティ協議会事務局を中心的に支える女性スタッフが呼びかける形での日頃から地域活動に熱心な女性が 8 名集まった。はじめの第 1, 2 回は、茶菓子を持ち寄り、コーヒーを飲みながらリラックスした雰囲気の中で「子供」や「地域」に関するさまざまな話題について会話し、楽しい時間を過ごした。また、桜島火山観測所の中道も参加しており、火山噴火への好奇心が醸成された。

(2) テーマの決定と「解釈のズレ」の発生

第 3 回の会話の中で、子供に紙芝居の読み聞かせをしている活動があることから、研究者側から紙芝居の作成をしてみてもどうかという提案を投げかけた。住民参加者だけでは取っ掛かりが難しかったため、学生が生成 AI も活用して、物語のたたき台を作成した。しかし、本プロジェクトの初期段階は、住民の間で「これは学生の研究か、自分たちの活動か」という解釈のズレが生じ、住民参加者の動機が低下した時期があった。

(3) 葛藤の表面化と主体の転換

その後、紙芝居プロジェクトが進まないと学生の修士論文が完成しないのではという懸念から、学生を支援する動機で臨時会が開かれた。その際、住民から「主体の所在」を問われ、学生が「住民のものである」と明言したことで、住民の間で「自分たちの活動だ」という共通認識が確立された。これを機に、研究者を除いた自主的な LINE グループ「さくら会」が結成され、主体の劇的な転換が起きた。この過程でも、学生への応答責任と支援欲が強く作用していた。

(4) 自走と共創による主体性の発揮

自律性の確立以降は、住民主導で紙芝居の作成が進み無事に完成した。第 7 回の集まりで研究者メンバーに披露された。また、児童クラブにて子供らへの読み聞かせも実現した。その後は、研究者の提案もなく、紙芝居で登場するキャラクターが進む等、自律的に新たな展開が進んでいる。

5. 考察とまとめ

結果的として、地域活動に積極的に従事する女性の集まりを自律的な活動を行う防災活動の担い

手が次第に形作られてきたが、実現したストーリー展開を事前に完全に見通して計画していたわけでもなく、予定することもできない。したがって、集まりの中で交わされる会話の展開の中で、その場の文脈を読み解きながら、研究者が押しつけがましくない形で介入を行ったり、関わり方に変化を付けたりしつつ、住民コミュニティの関係性を耕していくプロセスを取らざるを得ない。ストーリー展開のメカニズムを遡及的に解釈したとき、以下のような構造が読み取れる。

- ① 発散から収束への橋渡し：研究者側は特に議論をあえて導こうとしない。参加者は普段から地域活動に従事しているので、自ずと話は弾むが話題は発散し、どこに向かうのか参加者は次第に気になり始める。研究者は、参加者が子供と日常から関わっていること、紙芝居の読み聞かせがあるという情報から紙芝居作成プロジェクトを提案し、発散モードを収束する。
- ② ケアの関係性の逆転：学生の修士研究として実施したことから、住民は「学生をケアする主体」へと変容し、結果的に住民の主体性を引き出す要因となった。

押しつけがましくない研究者の関わり方の 1 つのシナリオとして、以上のような展開がありうるという仮説を導くことができた。本研究のようなアプローチは、研究者の実践から読み解くことができる関係性の変化を一般化して表現することが異なる実践の場へ展開するための実践知の蓄積に貢献できるという意義を有する。

参考文献

- 1) 井口正人, 中道治久 (2019). 桜島の大規模噴火を考える. 自然災害科学, Vol. 38, No. 3, pp. 279-345.
- 2) Bateson, G., Jackson, D. D., Haley, J., & Weakland, J. (1956). Toward a Theory of Schizophrenia. Behavioral Science, Vol. 1, No. 4, pp. 251-264.
- 3) 木下康仁 (2020). 定本 M-GTA : 実践の理論化をめざす質的研究方法論, 医学書院.
- 4) 大西正光 (2025). 現場で生きる人文学の可能性—桜島防災を事例として—. 山泰幸・向井佑介(編) 東アジア災害人文学への招待, 臨川書店.